

鳥取県米子市

博労町遺跡 第2次発掘調査 遺跡見学会資料



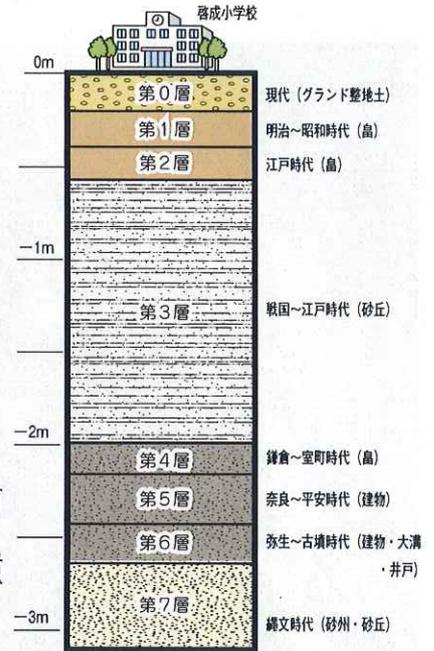
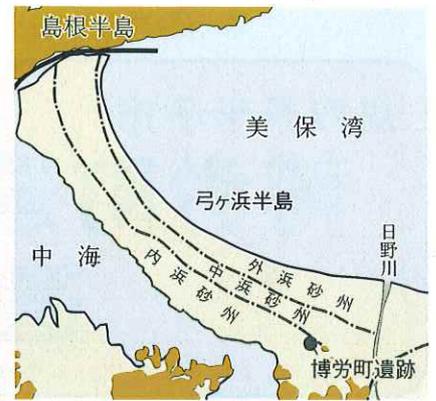
2区 鎌倉時代～室町時代の畠跡

令和3（2021）年5月20日～5月22日

一般財団法人米子市文化財団 埋蔵文化財調査室



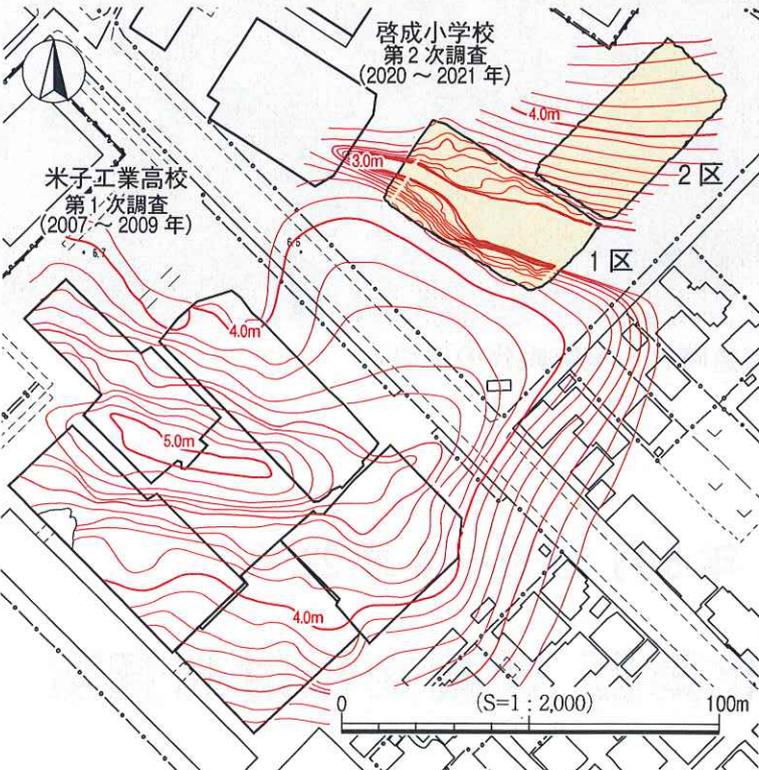
博労町遺跡の位置と周辺の遺跡



調査の概要

博労町遺跡は、JR米子駅の北東約1.3kmの博労町4丁目地内の弓ヶ浜(内浜)砂州上に立地する砂丘遺跡です。

第2次調査は、啓成小学校の校舎改築工事に伴って、昨年9月から約3,000㎡を対象に発掘調査を行っています。発掘調査は、掘削した排土の置き場を



確保するため、1区と2区の2つの調査区に分けて行っています。1区の調査はすでに終了し、現在は2区の調査を行っているところです。

今回の調査では、第1次調査の時と同様に、弥生時代終末~古墳時代前期(第6層)、奈良時代~平安時代(第5層)、鎌倉時代~室町時代(第4層)、江戸時代(第2・3層)の4時期の遺構を確認しました。

第1次・第2次調査地の位置と古墳時代の地形

弥生時代終末

↓

古墳時代前期

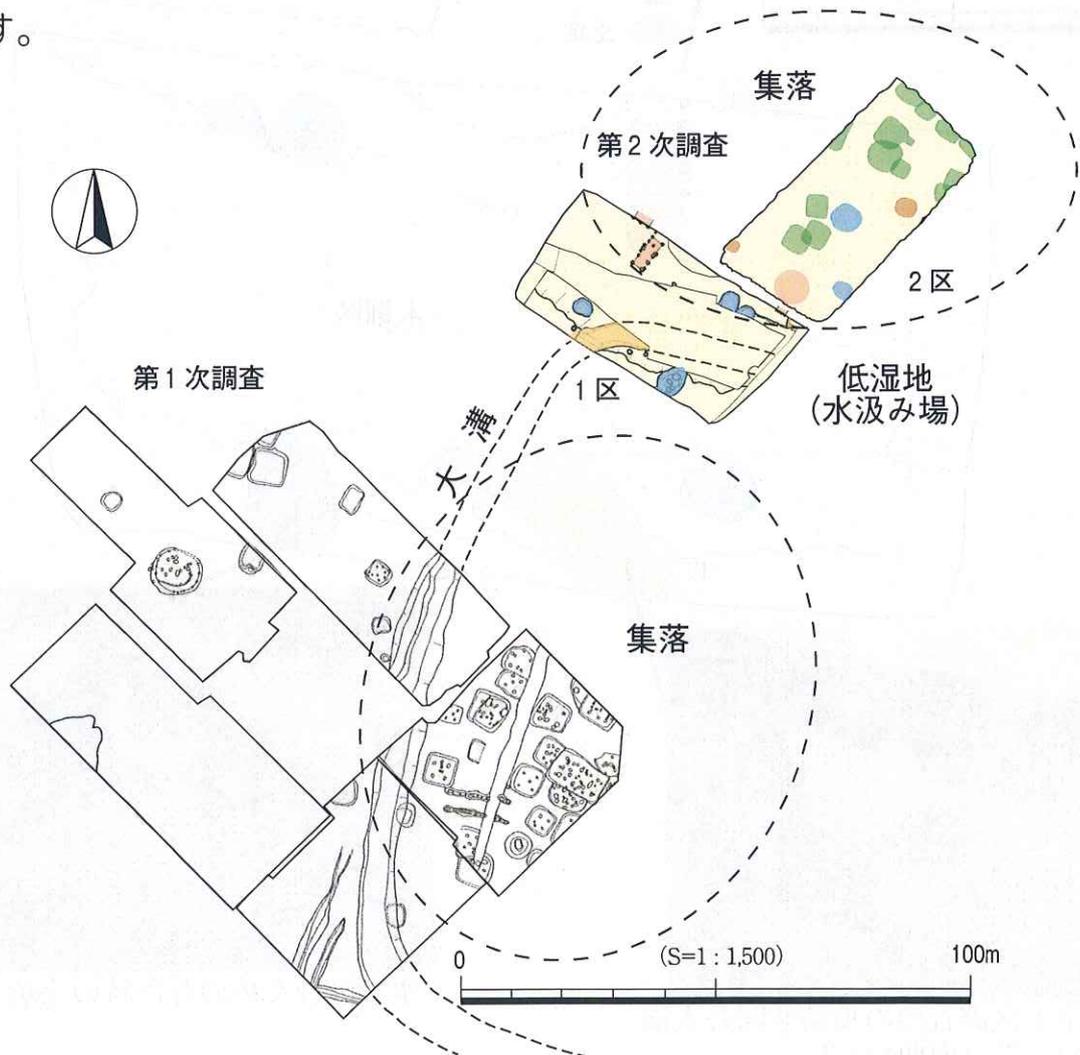
概要

第1次調査地の地形の高まりは北東側に低くなり、1区の中央を縦断するように溝状の低湿地が確認されました。そこでは、この時期の土器と共に縄文時代晩期の土器も出土しており、その時期から低湿地で人々の活動がはじまったことがわかりました。

この低湿地周辺では掘立柱建物^{ほったてばしら}3棟、溝状遺構1条、水を汲むための井戸状の土坑^{どこう}4基を検出しました。さらに北東側の2区にも地形の高まりがあり、^{たてあな}竪穴住居13棟、掘立柱建物、井戸状土坑2基などを検出しています。

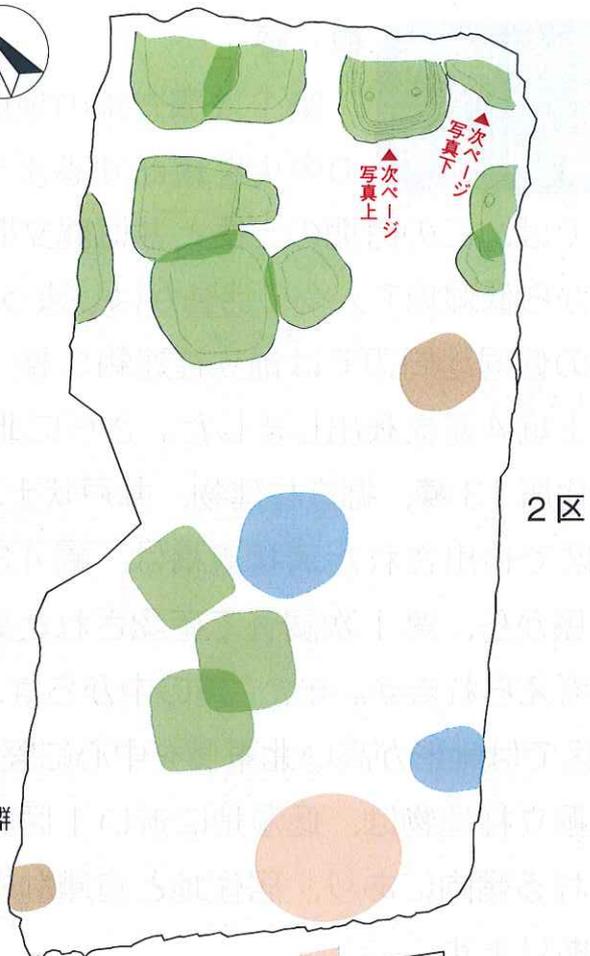
1区で検出された溝状遺構は、幅4.3～5.0 m、深さ0.9 mあり、位置的な関係から、第1次調査で確認された集落の周囲を囲む溝の延長部に該当すると考えられます。また、溝の中からは、完全な形に近い土器が出土しました。

2区では地形が高い北東側を中心に竪穴住居が検出されています。それに対して掘立柱建物は、低湿地に近い1区の北東側から2区の南西側にかけて検出される傾向にあり、居住地と倉庫などの貯蔵・収納地が分かれていた可能性があります。



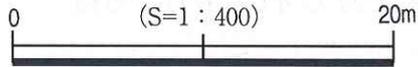
第1次・第2次調査 弥生時代終末～古墳時代の遺構

1区 掘立柱建物 (北東から)

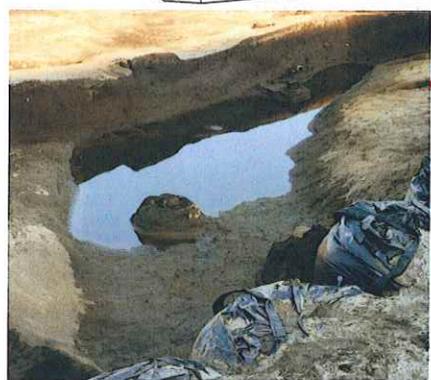


2区

- 竪穴住居
- 掘立柱建物・柱穴群
- 大溝
- 井戸
- 土坑



1区



第1次調査地の集落を囲む大溝の一部 (南西から)



水を汲むための井戸状の土坑 (南西から)

第2次調査 古墳時代の遺構分布図



2区 豎穴住居 (南東から)



2区 豎穴住居内の土器出土状況 (南から)

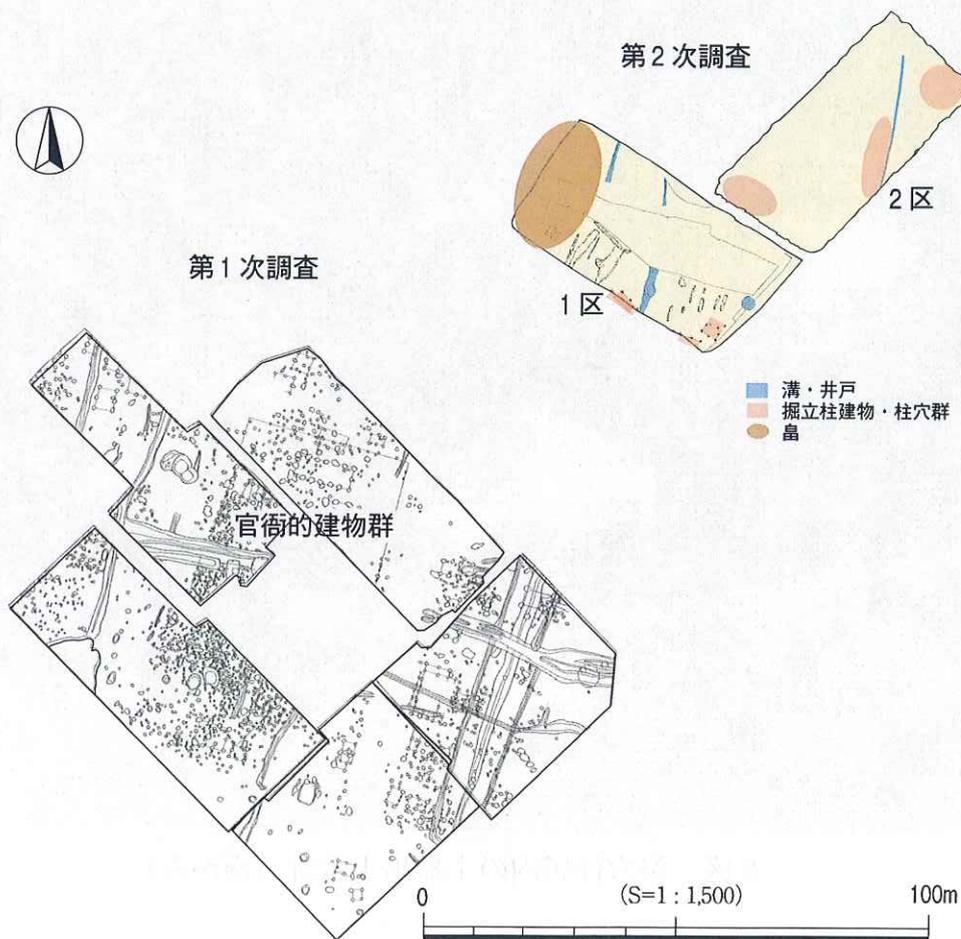
奈良時代
↓
平安時代

概要

第2次調査では、掘立柱建物4棟以上、溝状遺構18条以上、井戸1基、土坑などを検出しました。溝状遺構は、畠の畝間の溝のようにのびており、また、かなり細片化した土器の破片が多く出土していることから、畠の耕作がなされたものと考えられます。

第1次調査では、規則的に配置された建物群とこれらを区画する柵などが検出され、官人が身に着ける帯金具、硯や墨書土器などの官衙（役所）に関わる遺物も出土していることから、古代会見郡の郷家などの官衙ではないかと考えられています。一方、今回の調査では、建物は存在するものの、役所に関わる遺物が検出されておらず、畠が存在していたと思われることから、本調査地は役所の区域外に位置していたと考えられます。

また、2区では基盤となる砂州の砂が古代の地層を貫入する砂脈が多数確認されています。これは平安時代ごろに砂層が液状化するような大地震があったことを示しており、記録に残る元慶4（880）年11月の「出雲地震」の可能性ががあります。



第1次・第2次調査 奈良時代～平安時代の遺構

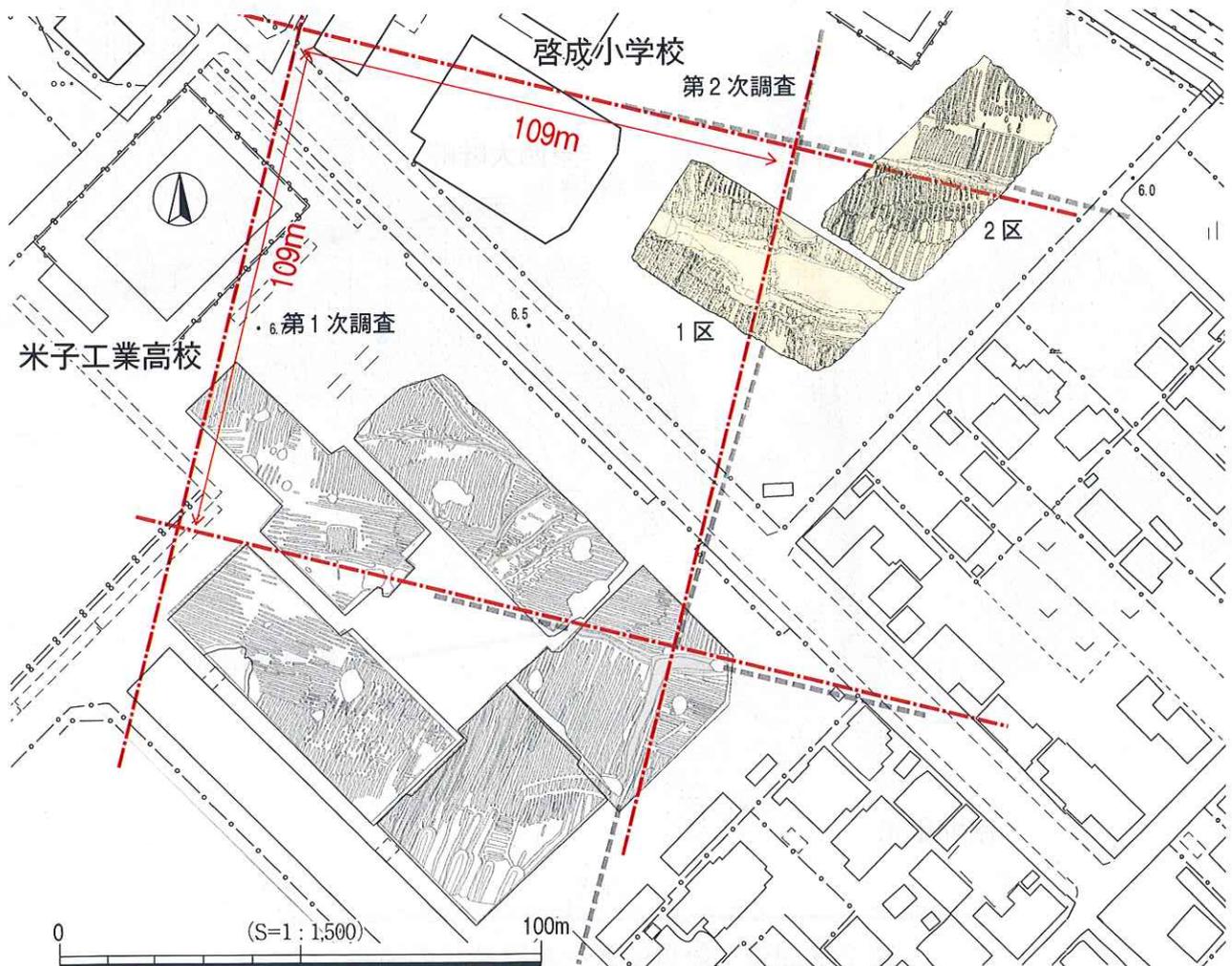
鎌倉時代
室町時代

概要

今回の調査区全域で畠跡を検出しました。畠は南北方向にのびる里道と東西方向にのびる大きな畦^{あぜ}によって大きく3つの区画に分けられ、さらに1区の中央を縦断する溝状の低湿地によって分断されています。また、各区画は畠^{うね}の畝の幅や間隔、畝の食い違い、畝の方向に違いが見られることからさらに細かく区画されていたと考えられます。第1次調査でも、南北方向と東西方向にのびる大きな畦が発掘されており、東西方向の畦の間隔がおよそ1町（約109m）であることから、古代の土地の区画である条里^{じょうり}を踏襲した可能性があります。

畠には人や牛の足跡や鋤^{くわ}で耕した跡が残っていました。第1次調査では、畠の土壌中に残った花粉や種子、稲の微化石の分析から稲、ヒエ、大麦、小麦などが栽培されていたと推測されています。第2次調査でも、現在、花粉の微化石の分析を行っていますので、その結果が注目されます。

畠は飛砂による被害が深刻になったためか、耕作が放棄されますが、畠の



第1次・第2次調査 鎌倉時代～室町時代の遺構

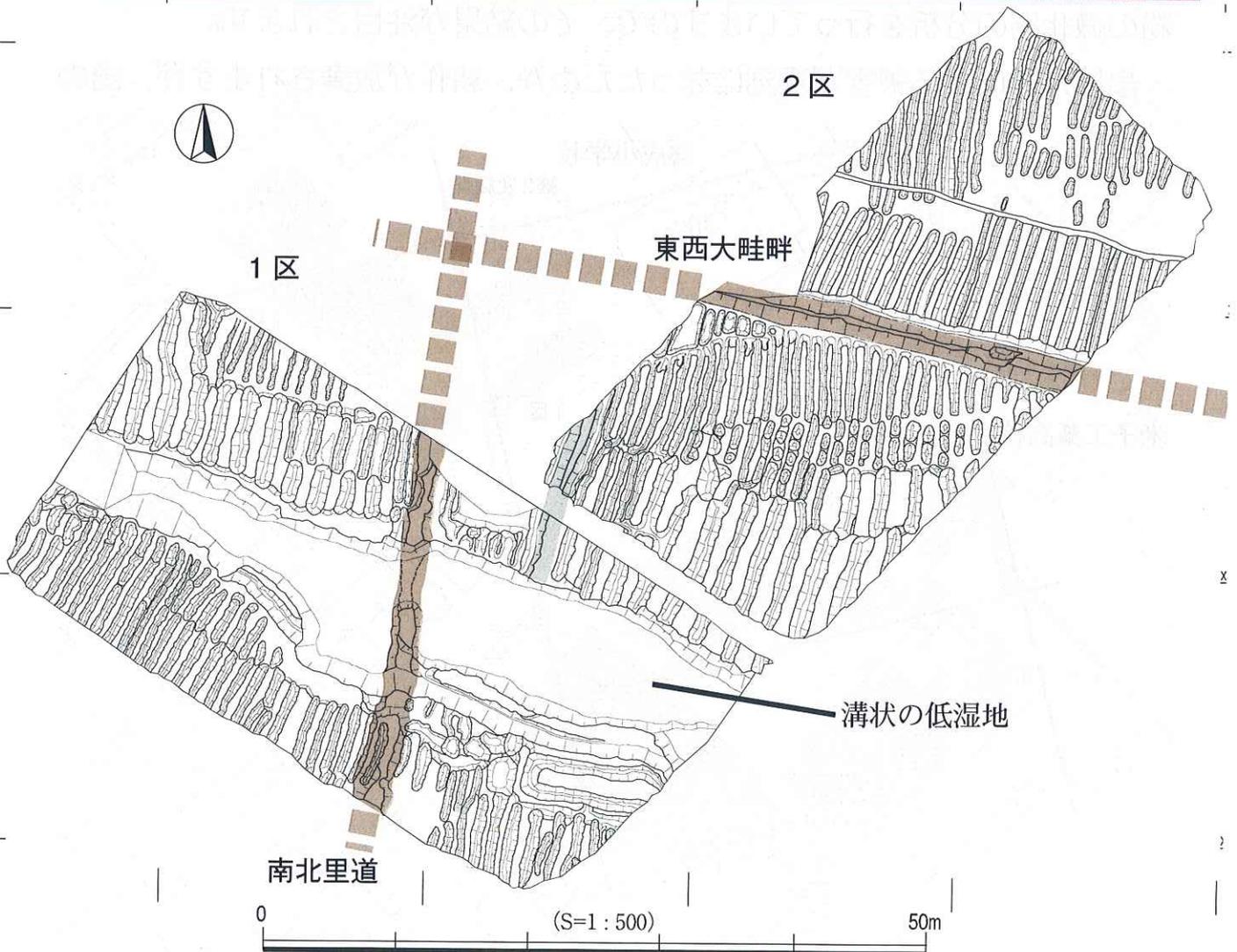
上面をほうように伸びた木の根が何本も残っており、しばらくは草木が生えていたと考えられます。

古代の条里区画と中世の畠の区画との位置関係

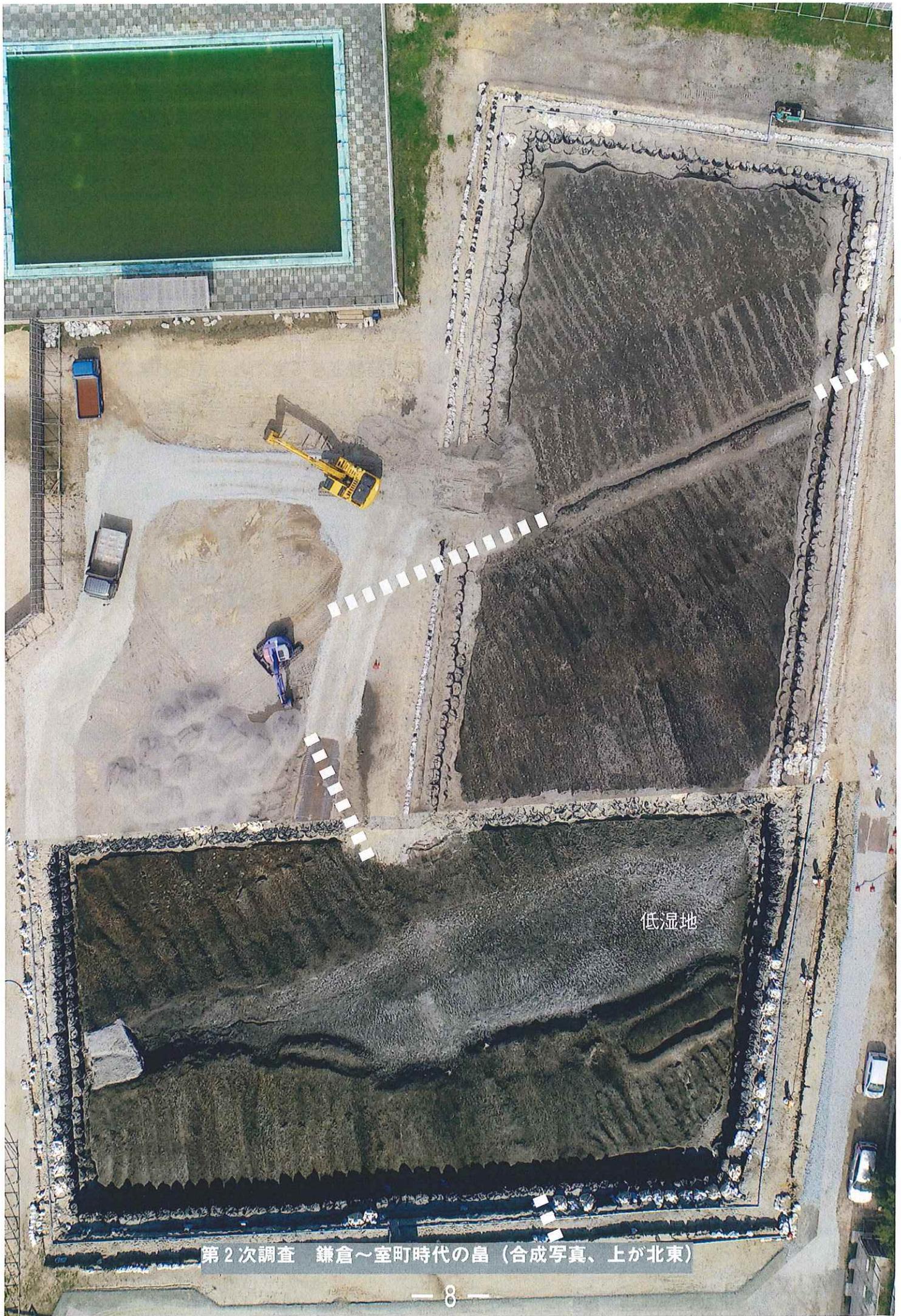
錦町第1遺跡



条里とは・・・古代の長さの単位である1町^{ちょう}（約109m）四方の区画を1坪^{つぼ}とし、坪を縦に6つ並べて1条とし、横に6つ並べて1里とした奈良・平安時代の全国に行われた土地区画制度。この制度により、土地の正確な位置や面積がわかるようになり、人民に税が課せられるようになった。中世からは荘園や公領^{ねんぐ}の年貢・租税を納める単位として踏襲された。今回の畠は荘園や公領の名田^{ごうりょう みょうでん}であったと考えられる。



第2次調査 鎌倉時代～室町時代の遺構



第2次調査 鎌倉～室町時代の島 (合成写真、上が北東)

江戸時代

概要

鎌倉時代～室町時代には、畠がつくられていましたが、それ以降は海岸からの飛砂によって砂が厚く堆積し、再び人々の生活や活動が行われるようになるのは江戸時代の幕末頃になってからです。

この時期には平行あるいは直交する 15 条の溝を検出しました。これらの溝の中には、溝の縁に護岸用の杭を何本も打ち込んだものや、水が流れた状況がうかがえるものがあり、畠の区画や用水路としての性格が考えられます。2 区の中央を東西方向にのびる幅約 4 m の大溝は、米川から直接用水を引いた幹線水路と考えられ、古代条里や中世の大畦と同じ位置にあり、土地を区画する基準線として近世まで踏襲されてきたと考えられます。



第1次・第2次調査 江戸時代の遺構